



一騎山古墳群の埴輪

常陸大宮市は那珂川と久慈川という大きな川が流れ、この2つの川とその支流に沿って多くの古墳が築かれています。しかしながら、発掘調査が行われたものは少なく、その様相が明らかにされたものは多くありません。そうした中で、市内の下村田に存在した一騎山古墳群は、古墳の内容が判明した貴重な事例です。古墳群は高校の建設予定地として発掘が行われ、前方後円墳1基と円墳3基、それと竪穴住居跡が6軒見つかりました。古墳が作られた時期は、出土した遺物から6世紀代と考えられます。

このうち、前方後円墳である一騎山4号墳では、埴輪が立てられていたことが分かりました。人物埴輪や動物埴輪など、大半は古墳をめぐる溝の中に倒れこんでいましたが、円筒埴輪のいくつかは元の位置を保っていました。人物は武人と男子、それに女子があり、動物は鹿と考えられるものが見つっています。これらの埴輪は出土した位置から、墳丘の北から西側にかけて一列に並んでいたのではないかと想定されます。

なかでも目を引くのは、人が台によじ登っているように見える埴輪です。頭や台は欠けている部分が多いのですが、両手を台につき、顔は前を見上げていたような姿をしています。いわゆる「跪く埴輪」と呼ばれるものの一つと考えられます。この埴輪は、誅を奏上している姿を表していると言う説があります。誅は人の死を悼み、生前の功績をたたえその人の系譜などを唱えるもので、日本書紀などに記述があります。おそらく、後継者が先代を引き継ぐ意味で行われたもので、重要な儀式であったのでしょう。



▲武人埴輪（破片）



小澤 重雄 氏
考古部会協力員
茨城県立歴史館
史料学芸部 学芸課 主席調査員

茨城県内での「跪く埴輪」は、動物の帽子をかぶっていることでも有名な桜川市出土の埴輪のほか、銚田市不二内古墳、行方市三味塚古墳などで出土しており、関東地方のなかでも比較的多く分布しています。ただ、一騎山4号墳の埴輪のような姿は、県内では例がありません。台に見える部分も単なる埴輪の台座ではなく、何か別のものを表したものでしょうか。

一騎山4号墳の埴輪がどこで作られたのか、今のところ定かではありません。一騎山4号墳の埴輪を改めて見直したところ、武人埴輪の破片がありました。これをみると、鎧は線刻で格子状に表現されています。このような表現方法は、県央部の武人埴輪に見られるものです。この地域には、ひたちなか市馬渡埴輪製作遺跡と茨城町小幡北山埴輪製作遺跡と2つの埴輪製作遺跡があり、一騎山4号墳の埴輪はどちらかの影響を受けて作られたと考えられます。



▲跪く埴輪

■問い合わせ■

文化スポーツ課

文化・スポーツグループ ☎52-1111（内線344）